
転生者は召喚術士

イエデンワ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生者は召喚術士

【Nコード】

N7902Z

【作者名】

イエデンワ

【あらすじ】

ネギま！の世界に転生した男は、召喚術を修めて楽に金を稼ぐことを己の方針とした。ネギのいとことして生まれた男は、はたして望み通りに生きることができるのか。

アンチはありません

1話（前書き）

毎日更新で書いていこうと思います。よろしくお願いします。

1話

働く、というのは現代社会人の義務らしい。日本では憲法に定められていたし、そもそもふつうは働かなければ生きていけない。

だが、待ってほしい。現代に入り、地球の人口は爆発的に増加している。発展途上国ではそうでもないが、先進国では職に就ける人間の数は年々減っている。つまり、余裕のある誰かが働かないことでほかの誰かを救うことができるのだとは考えられないだろうか。

そもそも、働くというのは地球環境にやさしくない。肉体労働にせよ知的労働にせよ、エネルギーを消費して二酸化炭素の排出を促進する。地球環境を守りたいのなら、労働は最小限にすべきだ。

アリアドネー大学付属魔法学校。その入学試験の会場で、問題を解き終わって暇を持て余した僕はそんなことを考えていた。

試験問題はごくごく簡単で、ほぼ満点に近い点数が取れている自信がある。実技試験も僕の実力なら楽に突破できるだろうし、最高学府の付属学校とはいえ大したことはないのかもしれない。

署名欄に「デレク・スプリングフィールド：9歳」と書かれていることを確認し、あくびをかみ殺した。

この世界に転生してから早くも9年が経つ。英雄の親戚ということからウェールズの故郷では特別扱いされてきたが、それもこの学校に入学すれば終わりだ。四六時中あったこともない叔父の話ばかりする連中とは縁が切れ、僕は自由に生きることができるのだ。

留学に当たって村の面々が出してくれた金額はアリアドネー大の卒業までの学資には少し足りないかもしれないが、それはまあ自分で稼げばいいだろう。魔法使いというのは儲かるのだ。とくに、僕のような召喚術士は適当に命令を出すだけで仕事ができるのだからちよろいものである。まさに人生イージーモードというやつだ。

そんな僕の人生設計はズバリ、四十歳まで働いてあとはリタイア。がっばり稼いだお金で楽隠居。これである。魔法の研究は楽しいので、老後は魔法の開発でもしながら過ごそうかと考えている。

召喚術、という一見面倒くさそうでかつこよくない分野を専攻にしているのも、楽しんでお金を稼ぐためだ。召喚術士はどんなに距離が離れても召喚したものを使役できるし、要するに召喚したものを鉱山に送ってしまえば楽しんで金が稼げるのである。召喚術士の間ではあまり好かれていない行為だが、いまは僕の大事な収入源だ。魔法の研究というのはまじめにやればやるほどお金がかかるため、お金はいくらあっても足りることはない。

故郷では天才だなんだともてはやされた僕だが、じつはそれほど大したことはない。確かに魔力量は並の魔法使いの数倍あるし前世の知識があるゆえのズルもできるが、もともとは一般人だ。戦場で人助けなど怖くてやりたくもないし、召喚術以外の勉強はかなり適当だ。適当にやっても人並み以上にはできてしまうあたり英雄の親戚なのかもしれないが、要するにモビルスーツは強いけどパイロットは未熟な状態なのだ。

そんなことを考えていると、いつの間にか試験時間が終わったようでチャイムが鳴り響いた。試験監督が解答用紙を回収し、解散が言い渡される。

試験会場を出て、宿泊しているホテルへと向かう。合格発表は一週間後なので、それまではアリアドナーに滞在するつもりなのだ。資金には余裕があるので、せいぜい観光を楽しもうと思う。

しかし、こうして魔法世界の都市を歩いているところがファンタジーの世界だと実感させられる。亜人のたぐいにはもう慣れたが、やはりどこか違和感を覚えるのは僕が元日本人だからだろうか。魔法使いとしては一人前程度に習熟しているが、どうにも魔法世界にはなじめない。

ホテルの自室につくと、そこには先客が待っていた。

「スプリングフィールド様。依頼の品物、確かに回収してきました」
僕の部屋の隅にちょこんと座っているのは、一週間前に僕が召喚した悪魔だ。悪魔とは言っても最下級の雑魚なので、駆け出しを卒業したばかりの僕でも自由に使役できる程度の霊格でしかない。

外見はさながら手乗り妖精のようで、悪魔らしくないといえば悪魔らしくない。だが、だからこそ安心して使役できるのだ。悪魔だと看破されることはまずないだろうから、ちょっとしたお使いや採集にはうってつけなのである。

小妖精のような外見の悪魔が差し出したそれを受け取ると、僕は上機嫌にうなずいた。

「うん、ちょうどいいサイズだ。じゃあもう用はないから、今回は戻っていいよ」

僕がそう言うと、悪魔はぺこりと一礼して魔法陣を出現させ、姿を消した。

召喚術士が使役する悪魔は、そのほとんどが術者と「契約」を済ませた悪魔だ。「契約」というのは現代社会における雇用契約とほとんど同じで、術者が宝石や貴金属、あるいは魔力などを代価に悪魔を使役するという方式だ。さきほどの悪魔には代価としていくばくかの金貨を与えているため、ここ半年にわたって友好的関係が築けている。

さて。

僕がこれから始めるのは、中級悪魔の召喚だ。あわよくば契約を済ませて中級の悪魔を使役できるようになりたい、という願望から生まれた計画で、契約が成功すれば金もうけの手段はさらに増える。いままでは下級の悪魔を鉱山に送って労働させていただけなのでそれほど金もうけの効率は良くなかったが、中級の悪魔を召喚できれば話は変わる。

なにせ、連中はそこそこの戦闘能力と「現世でやられても死にはしない」という性質を持っているのだ。戦場に送って傭兵として働かせればかなり儲かる。

召喚術のいいところは、使役するものが悪さをしても術士に迷惑がかからないということだ。悪魔とかわす契約の中には「なにがあっても雇い主のことを話さない」という旨の一文があるし、都合がいいことこの上ない。

この世界の魔法使いの大半は、その力を正義のために役立てるべ

きだと考えている。当然世界平和の維持も魔法使いの仕事だと考えている節があるようで、だから金で雇われて戦場で働く魔法使いは同法から厳しく排斥される。

しかし。召喚術士にとってそんなことは問題にならない。なぜなら、自分が戦場に行く必要がないのでいくら傭兵まがいのことをしようともばれるはずがないのだ。報酬の受け渡しに注意しておけばいいだけなので、ちよろいものである。

物思いにふけりながらも、故郷から持ってきた魔法のカバンを開いてレジャーシートを取り出す。このレジャーシートには召喚した悪魔を拘束するための魔法陣が描かれており、これにいくつかのルーン文字を書き足して魔力を注ぎ込めばいつでもどこでも召喚が可能になるという優れたものである。故郷にいた召喚術士がくれたものだが、もともとは叔父であるナギ・スプリングフィールドが拾ってきたものらしい。とにかく性能がいいので重宝している。

ホテルの床にレジャーシートを敷き、あらかじめ用意しておいた牛の血でルーン文字を書き足す。魔法陣とルーン文字に不備がないかどうかを三度チェックし、万全の態勢を確信した僕は琥珀のかけらを魔法陣の中央に置いた。召喚する悪魔がある程度選別するための仕掛けで、ルーン文字触媒、呪文の組み合わせによって召喚される悪魔の性質や霊格が変わってくるのだ。

今回召喚するのは、情報収集や隠密行動に適した中級悪魔だ。直接戦力になる戦闘特化型の悪魔も傭兵に向いているが、作業員向きの悪魔というのはもっとありがたいがられる存在だ。絶対に口を割らない作業員など、人間には到底ありえない。死んでもリサイクルが

できるといふ点では、悪魔ほど工作員に向いた生き物はいないかもしれない。

時刻は正午を一時間ほど過ぎたころ。悪魔の力が最も弱まる正午からは少しだけ時間が経っているが、まあ大丈夫だろう。

始動キーを唱えるといったん口をつぐみ、それから呪文を唱え始める。

朗々と呪文を唱えていると、体から魔力が流れ出すのを感じる。

予想外に魔力の消費が早いことに少しだけ焦るが、これくらいなら誤差の範囲内だ。気持ちを落ち着けながら詠唱を続け、徐々に輝き始めた魔法陣をじっと見据える。

「……満たされぬもの、わが呼びかけに答えて出でよ」

呪文の最後の一説を口にすると、ひととき大きな魔力が吸い取られ、そして次の瞬間、魔法陣が強く発行して中から何者かが出現した。

「……お前か、俺を召喚したのは」

粗野な口調にむっとするが、ここで腹を立てては相手の思いつっぽ。召喚された悪魔は、口先三寸で自分を拘束する魔法陣から逃れようとするものだ。言葉に耳を貸してはならない。

「契約だ」

悪魔の目を睨み付け、僕はそう言った。

召喚された悪魔は、悪魔にしては華奢な体格だった。身長は2m以上あるようだが、横幅はそれほどでもない。全身から放たれる威圧感の下級悪魔のものとは別格だが、相手は魔法陣に拘束されている。なんら恐れることはない。

「やとわれの職員として、地球の中東あたりで変装して活動してほしい。報酬は半分ずつで、休暇は応相談だ」

僕が一気にまくしたてると、悪魔は沈黙を保ったまま考え込むそぶりを見せた。

どうも試されているようで気に入らないが、悪魔が口を開くのを待つ。どうせ、僕が根負けして条件をよくするのを待っているのだろう。その手には乗るものか。

5分ほど沈黙が続いた。

悪魔の顔を眺め続けるのも退屈なので、僕は悪魔に背を向けて召喚術の教本を取り出す。魔法陣は万全だ、悪魔が陣から出てくることはない。

魔法でお湯を沸かして紅茶を入れ、教本を開く。内容が頭に入るわけではないが、こういうポーズをとることが重要なのだ。そのうち根負けして妥協するに違いない。

一杯目の紅茶を飲み終わり、二杯目を入れようとしたその時。ようやく悪魔は口を開いた。

「いいだろう。補足はあるか？」

悪魔との契約がうまくいきそうだと感じた僕は、にやりと笑って

から答えた。

「戦場に落ちてる銃とか爆弾とか、できるだけ回収して持ってきてくれるとありがたい。修理したり改造したりして売ると金になると思うんだ」

「そのくらいなら問題はない。では、契約を」

即答した悪魔は表情を変えない。もともとそういう気質の悪魔なのか、それとも僕を動揺させるための演技か。人間味がないことこの上ないが、考えてみればこいつは悪魔だ。人間味がないのは当然だろう。

「じゃあ、これにサインを」

そういって、僕は契約書と羽ペンを取り出した。召喚術士向けに販売されているマジックアイテムで、術者と悪魔がそれぞれサインすることで契約が結ばれるというアイテムだ。

書面に目を通した悪魔がサインをすると、契約書は発行して僕の手元に戻った。僕はそれを魔法のカバンにしまいこみ、悪魔に向き直る。

「じゃ、いまから仕事してもらっていいかな？」

「了解した、術士殿」

悪魔は見た目に反して優雅な礼をすると、忽然と目の前から消え失せた。長距離移動系の魔法を使ったのだろう。どうやら、魔法の腕は僕よりずっと上らしい。

まあ、これですます財布も潤うし、一か月後からは楽しい学校生活の始まりだ。せいぜい授業にでも備えて勉強をしておこう。

そう考えた僕は、魔法陣や道具一式を片付けふたたび魔法の教本を開いたのだった。

2話

アリアドネー大学付属魔法学校は、入学年齢も卒業年齢も決まっていない自由な学校だ。卒業に足るだけの実力がついたと教員に認めてもらえば卒業認定証がもらえる、そんな学校なのだ。つまり、本気を出して勉強すれば常人よりはるかに早く大学に入ることでもできるということ。ここを卒業すれば魔法世界の最高学府と名高いアリアドネー大学に無条件で入学できるのだから、モチベーションも上がるというものである。

入学式を終え、今日は時間割を組む日だ。ここでは各自が自分の好きな学科を選択して履修するという方式のため、時間割は自由に組んでいいことになっている。

僕が修めたいのは召喚術全般にマジックアイテムの作成、それから補助系の魔法だ。必修の授業というものは存在しないため、本当に学びたいものだけを学ぶことができる。何とも素晴らしいと思う。

召喚術というのはいくつかある魔法の体系の中でもとくに魔力量に依存するところが大きい。なにせ、使役するものを現世にとどめるには結構な量の魔力を消費するのだ。そのため、魔力量の多い僕は召喚術士への適性があるといえる。

いまのぼくの魔力量だと、中級の悪魔をもう一匹召喚すれば魔力は限界だろう。実生活で魔法を使うことを考えると、中級一匹と下級六匹という現状に満足するしかないようだ。もっとも、召喚時に使用する魔法陣やルーン文字の質を高めることで悪魔をとどめるのに必要な魔力は随分と減るといふ話だ。学校ではそうした技術を中心

に勉強を進めようお考えている。

とりあえずは、魔法陣作成とルーン文字実習、マジックアイテム作成と補助系魔法。そのあたりの授業をとれば問題はないだろう。

さらさらとペンを動かし、時間割を作る。いくつか興味深い授業もあったが、僕は老後のために資金を蓄えなければいけないのだ。余計な授業料を納める気にはならないし、未練を感じながらも必要最低限の授業だけをとることにした。

が、必要最低限の授業だけをとったつもりでも、結局は平均より多めの科目を受講することになったようだ。月曜日から土曜日まではほとんど隙間なく埋まってしまった。

理由は簡単だ。悪魔を使役するなら、悪魔の生態や社会について教える授業も取らなくてはならないのだ。それらの講座も取ることにしてしまった。

これでは、とてもではないが悪魔たちをフルに働かせていられる余裕はないだろう。下級悪魔たちについてははやいところ鉱山から引き揚げさせようと決心し、完成した時間割を受け付けに提出した僕はそのまま下校した。授業はあさってからなので、明日一日は余裕がある。さて、何をすべきか。

明日の予定を考えながら歩いていると、すぐにホテルについてしまった。僕は学生寮に入るためにこのホテルからはそろそろ引き上げなければいけない。

自室の扉を開けると、そこには先日召喚した中級悪魔がいた。

「やあ、調子はどうだい」

声をかけると、彼はこちらに札束を投げてよこした。百ドル札の札束。数えてみると、

30あった。つまり、3000ドルの収入ということか。

「今回は運が良かったが、次からはこうもうまくいかないことだ。銃器類はここに置いていく」

どうやら彼は報告のためだけに帰ってきたようで、それだけ言うと転移の魔法で消え失せてしまった。

彼が消えた後には、数丁の拳銃とでかいライフル、マシンガンらしきものが残っていた。どれもこれも薄汚れているが、少なくとも大きな破損はない。

アリアドネーにも銃器を扱う店はあったはずだし、ルーン文字で銃を加工するのも面白いだろう。さいわい、この街に到着した際に下級悪魔を使ってそういう店の場所は調べてある。僕は通販で買った年齢詐称薬を取出し、一錠だけ口に放り込むと出かける準備を始めた。

僕の持っている魔法のカバンには、質量を無視して好きなだけ荷物をしまうことができる。これもまた亡き叔父の遺産だそうで、彼

の息子があまりにも幼すぎるといふ理由で僕に送られた。僕が物干しそうな顔をしていたのも原因ではあつたろうが、それにしてもあの村の住人は英雄の関係者に対して気前が良すぎる。

現在、あの村にいる英雄の関係者はネカネさんとネギだけだ。さぞかしちやほやされていることだろうが、あいにくとこれっぽっちもうらやましくはない。英雄という言葉にあこがれないわけではないが、戦場で体を張って人助けなど僕には到底無理な話なのだ。後方支援くらいなら考えないでもないが。

そんなことを考えながらホテルを出て、表通りにある魔法用具店に向かう。魔法世界の主な都市のほとんどに出店してる大手チェーンで、僕が必要とするものもきつと手に入るだろう。魔法用具店に行つた後は裏通りの銃器の店に行き、カタログをもらつてくるつもりだ。

平日の昼間だからか、人通りは少ない。休日にもなればラッシュ時の東京駅並みに混雑する場所だが、どうやら今日は苦しい思いをせずにすみそうだ。

魔法用具店に入ると、まずはその品ぞろえの多さにびっくりした。この店は5階建てだが、なんとそのすべてが魔法用具の売り場なのだ。日本の平均的なホームセンターの3倍ほどはありそうだ、と内心ため息をつく。

エレベーター近くの売り場案内を見てほしいものがどこにあるかを探す。今日買う予定の品は、金属に文字を掘り込むための道具と魔力のこもった特殊なインク、それと杖自作のハンドブックだ。いま使っている発動媒体は指輪型の品で、このタイプの発動媒体は本来魔法剣士が扱うものだ。僕は接近戦など絶対にごめんだし、杖タ

イプの発動媒体の方が性能が高いことが多いのだ。それに自作した杖は市販のものよりも自分にフィットするので、魔力の消費を抑えられるとか。マジックアイテム作成の授業も（金になりそうなので）取るし、そこで培う技術を生かさない手はない。

エレベーターで四階まで上がり、品物を探す。僕のほしいものはすべてこの階にあるようなので、いちいち移動する手間が省けた。

インクは目立つところに置いてあったので、とりあえず二番目に安い無難そうなものを選んだ。僕はルーン文字に関しては駆け出しもいところだし、あまり高価な素材を使って失敗するのはよくないだろう。高価な素材を扱うのは高い技術が身についてからでいい。

自作杖のハンドブックも見つけたが、しかし肝心の文字を掘り込む道具が見つからない。ネットで調べてくれば良かったかと思いつつ売り場をうろろしていると、店員さんが声をかけてきた。

「お客様。何をお探でしょうか」

「ああ、金属にルーン文字を掘り込む道具がほしいんですが……」

眼鏡をかけた誠実そうな顔の男だった。

「それでしたら、ご案内します」

どうぞこちらへ、と男は僕を先導する。

ついた先には「鉄筆コーナー」という標識がぶら下がっており、僕の中に築かれていた鉄筆のイメージがガラガラと崩れ落ちていった。鉄筆ってそういうもんじゃないだろ。

「ありがとうございます、助かりました」

店員に礼を言い、品物を物色する。

インクと違って消耗品ではないので、最初から高価なものを買っても問題はないだろう。

売り場の中で一番高価なものを選び、かごに入れる。少々高すぎるかとも思ったが、中級悪魔が持ってきた報酬がある。このくらいの買い物は余裕だろう。

レジに並んで会計を済ませ、購入した品物を魔法のカバンに入れて店を出た。財布はだいぶ軽くなったが、それに見合うだけの買い物ができたと思っている。

悪魔というのは傭兵として扱いのもいいが、武器商人としても優秀だ。戦場で拾った銃を回収して修理・加工して売れば結構なお金になるだろう。元手がほとんどかからないマジックアイテム作成の練習にもなるので、我ながら素晴らしい案だと思う。

表通りから路地裏へ抜け、地図を片手に銃器を取り扱う店を目指す。アリアドネーは比較的治安が良かったため路地裏に不良がたむろしているようなこともなく、僕のようなチキンハートでも安心して通行できる。人目があるところを歩くに越したことはないが、僕は魔法使用であることを示すローブを着ている。わざわざ魔法使いにちよっかいを出す不良もいないだろう。

実をいうと、僕自身の戦闘能力はそこら辺の魔法使いに毛が生えた程度でしかない。悪魔をこの世界にとどめるために魔力を消費しているから、戦闘に費やせる魔力の量が情人とほとんど変わらないのだ。攻撃呪文もそれほど熱心に覚えたわけじゃないし、魔法の矢といくつかの捕縛術が使える程度だ。まあ、いざとなったら下級悪

魔を数匹呼んで使えばいいのだ。何度も言うが、召喚術士というのは単独で戦ったら負け。他力本願の物量作戦が召喚術士の本懐なのだ。

契約した悪魔が回収してきた銃器類はほとんど損傷がなかったよ
うで、店では弾薬とカタログ、手入れの道具だけを購入した。自身の護身用にも拳銃が欲しいから、手入れのやり方についてのパンフレットも分けてもらった。

ホテルに帰着し、魔法のカバンを開けて中身を取り出す。鉄筆、インク、ルーン文字の解説書、拳銃、工具。これだけあれば銃の改良には事足りる。

拳銃の取扱説明書をめくりながら慎重に解体し、油をしみこませた布でよく手入れする。何とも言えない匂いが部屋に広がるが、こんなものは後で魔法でどうにかすればいい。

一通りの手入れを終えると、今度も説明書を見ながら慎重に組み立てた。銃というのは繊細だから注意して扱うように、と銃器店のオヤジが言っていたことを思い出す。魔法障壁があればただの銃が暴発した程度では大した怪我は負わないが、それでもこれは売り物なのだ。購入者から苦情が来ては困る。

組み立てが終わると、今度はルーン文字の解説書を開いてインク瓶のふたを開け、鉄筆の先端をインクに浸した。

今回刻むルーンは、銃本体の保存状態をよくするルーンだ。錆や細かい砂から内部の機構を守り、手入れの手間を省くためのルーンである。

銃器店のオヤジ曰く、銃の威力に関係するような改造は銃の構造をよく理解できるようにしてからにしろとのこと。素人が内部構造の改造に手を出すとロクなことにならない、と言われた。専門家の言うことなら間違いはないだろうから、習熟するまではその言いつけを守ろうと思う。

インクに浸していた鉄筆を握り、拳銃を作業台の上に乗せる。刻むルーンは暗記してあるので、教本を見なくても問題はない。

鉄筆は値段相応によく働く。何かの魔法がかかっているのか、グリップを切り裂き金属に溝を刻みこんでいる。事前に練習として紙にルーンを書きつけたりしていたが、ひよつとすれば紙に書くのと同じくらいの労力で金属にルーンが刻めてしまう。いい買い物をしたな、と悦に入りつつルーンを施し、ティッシュでこぼれたインクをふき取って作業は終了した。

この銃は安物でそれほど良くないものらしいから、適当に売りさばいてしまおう。自分で使うものには万全の加工を施したいし、リアドナーにいる間は戦闘に参加することはまずないだろう。ここに就職するかということはまだ考えていないが、就職は当分先だろう。とりあえず、いまは加工技術に磨きをかけなければいけない。

部屋の片づけが終わり、年齢詐称薬の効果も切れた。ぶかぶかに

なった服を着替えながら、僕はこれからの人生設計について考えを巡らしていたのだった。

3話

学校が始まって3カ月がたった。僕ことデレク・スプリングフィールドはいま、とても仰天していた。つい先週の試験でほとんどの科目で一位をとって浮かれていたところにとんでもないニュースが飛び込んできたからだ。

非常に驚くべきことに、故郷であるウェールズの村が悪魔の大群に襲われ、村人のほとんどが石像にされてしまったというのだ。

村人の大半はいつも叔父の話ばかりしていたとはいえ、僕もかなりお世話になっている。身寄りがなかった僕を育ててくれたスタンさんをはじめ、数人の村人とは親しくしていたのだ。それが石像にされてしまったというのだから、取り乱すのも当然と言える。

「校長。ちょうど冬休みも近いですし、いったん帰ってもいいですよ
うか」

知らせを受け取った僕はとりあえず校長のところへ行き、直談判を始めた。この学校には担任という制度がないため、こうした相談ごとについては校長に持つていくのが習わしなのだ。

「うむ、故郷の一大事とくれば帰らねばならぬな。すぐに手続きを
しておこう」

「ありがとうございます」

安堵のため息をつき、校長に礼を言っ
て校長室を辞する。

すでにホテルは引き払って寮にうつっていたので、僕は学生寮の自室へと向かった。

中東に派遣した中級悪魔もそこその働きを見せており、下級悪魔は魔界へ戻したもののかなりの額の収入を得ることに成功した。加工した武器に関してはアリアドネーの裏通りの武器商人と話をつけ、それなりの値段で売ることに成功している。魔法の触媒やマジックアイテムの素材には惜しむことなく金をつぎ込んでいるが、それでも先月の出納帳を確かめたら大幅な黒字だった。

メルディアナ魔法学校の校長から来た手紙によれば、明日にはこちらに迎えの人間がくるという。僕はそれに備えて、出かける準備をしていた。

契約した悪魔が返ってきたときのために置手紙を置き、勝手に部屋にはいられないように3重の力ガをかけ、散らかった衣類類をトランクにまとめ、そして賞味期限の近い食べ物を胃の中にしまいこむ。どれくらい部屋を空けるかはわからないから、定期購読している新聞も止めたほうがいいのかもれない。ガスの元栓もきつくしめ、冷蔵庫の裏のゴミブリホイホイを新しいものに取り換えると幾分かは落ち着いた。

ずいぶんと部屋が汚くなっていたことを実感しつつ、新聞社に電話をかけて配達を止めてもらい、ベッドの下に散らばった魔道書の類を棚に戻す。悪魔の真名や特徴が書かれている本で、こういうものを有効に使うと悪魔との契約を有利に進められる。

この学校の授業は日本の中学や高校とはまったく違い、どちらかといえば大学のゼミに近いものがある。講座をとった十名前後のメンバーと講師が積極的に話し合っ理解を深めていく授業は、僕に

はとても新鮮だった。もともと魔法に対する好奇心はあったが、あ
あいう授業スタイルは好奇心を強く燃え上がらせる。それに、講師
たちがみな自分の専門に誇りを持ちながらも生徒にそれをわかりや
すく教えようとする姿勢は非常に好感が持てるものだ。

部屋の片づけと旅の支度を終え、ティータイムにするかとやかん
を火にかけようとしたその時。部屋に敷いた魔法陣が発行し、中東
に派遣していた悪魔が帰ってきた。

この悪魔、名前をレミーというのだが、どうやら彼は当たりだっ
たようだ。情報収集の技にたけるほか、戦闘能力も中級悪魔の中
はかなりあるほうらしい。本人は謙遜していたが、ほかの中級悪魔
を召喚して一緒に仕事をさせたときにそんな事を聞いた。

そんなレミーからは現在、透明化の魔法を教えてもらっている最
中だ。魔法障壁と違って攻撃魔法を行使すると効果が消えてしま
うのがネックだがなかなか便利な魔法である。魔法の教本は高いので
教えてもらえることは彼に聞くのがベストなのだ。学校では教えて
もらえないような実践的な呪文もいくつか教えてもらったし、習熟
度こそお粗末なものだが鍛錬を積みれば戦場でも通用するだろう。も
っとも、僕は可能な限り戦場に立ちたくはないのだけだ。まあ、力
をつけておくのは悪いことではないと思う。

「おや、どこかへでかけるのですか？」

いつものように報酬を山分けしたあと、レミーは僕に尋ねた。

「ああ、少し用事が出来て故郷に帰らなきゃいけないようになったんだ。
ちようどいいや、護衛をお願いできる？」

「いいですとも。透明化して後ろから付いていきましょっ」

そう答えると、レミーはぶつぶつと呪文を唱えて透明化してしま
った。

「あ、いまは魔界に戻ってていいよ。明日迎えの人が来たから呼ぶ
から、それまで待っていてくれれば」

「了解しました」

なにもない空間から声が響いたかと思うと、そこにあった悪魔の
気配は消えうせた。

ちなみに、自らの魔力や気を隠すための魔法というのも存在する
らしい。難しい術式なのでまだ手を出していないが、こちらもなか
なか使えそうだ。やはり攻撃魔法を使うと効果が消えるようだが、
透明化と合わせれば素晴らしい効果を発揮するだろう。

さて。

時計を見れば、もう十時を回っている。風呂に入った後に知らせ
を受け取ったのもうこんな時間だ。

目覚まし時計をセットすると、僕はベッドに入って眠りについた。

翌朝。

朝食を済ませた僕は荷物の入ったトランクを持ち、学校の校門にたたずんでいた。時刻は午前6時。レミーは僕の背後で透明化して控えている。

レミーは人間の姿に変身することもできるのだが、今は控えさせている。服が足りないのだ。僕は年齢詐称薬と一緒にいくつか服も買ったが、レミーの人間形態は細身の老紳士。イギリス人のテイーンエイジャー向けの服が似合うはずもなく、そのうち趣味のいいスーツなんかを買うまでは人間に変身させるのは控えさせるつもりだ。

しばらく経つと、向こうから人がやってくるのが見えた。くたびれたコートを着た、無精ひげが似合う男性だ。見た感じ30歳前後だろうか。

男は僕に気付くと陽気に手を振り、啜っていた煙草を消した。

「やあ、僕は高畑・T・タカミチ。君を迎えに来たよ、デレク君」

レミーを護衛につけた意味ないやんげ。僕を迎えに来た人物はなんと、世界委規模で有名なお方だった。

「あ、デレク・スプリングフィールドです。後ろに控えてるのはレミーといって、契約してる悪魔です。今日はよろしくお願いします」

誰が来ても驚かないつもりだったが、有名人が迎えに来てびっくりしたので少し緊張してしまふ。

「ははは、そんなに改まらなくてもいいよ。君の叔父さんにはよくお世話になったし、僕はただの英語教師だから」

嘘をつけ。

心の中で突っ込みを入れる。それにしても、悪魔云々については突っ込まないのか。

「じゃあ、行きましようか。ゲートを使うんですか？」

「ああ、アリアドネーのゲートからロンドンに出て、そこで転移符を使うことになってる。さ、行こうか」

ジャケットの内ポケットから転移符を取り出して僕に見せ、高畑氏はそう言った。

歩き出した高畑氏の横に並び、アリアドネーの郊外にあるゲートを目指す。

「ところで、ネカネさんは無事なんですか？ 手紙で姉さんのことだけは触れられていなかったの……」

そう、メルディアナの校長から来た手紙には、スタンさんをはじめめとする僕が親しくしていた面々の容態については書かれていたが、ネカネさんについては何も触れられていなかった。死者は一命も出なかったと手紙にはあったから大丈夫だとは思っただが……。

「ああ、ネカネ君なら大丈夫だよ。ネギ君の話によれば、君の叔父さんが来て助けてくれたんだそうだ」

「えっ、サウザンドマスターは死んだんじゃ？」

「僕もそう思ってたんだけどね。どうやら、そうでもないらしいんだ」

「そうですか……」

正直、複雑な気分だ。

確かに、伝え聞いているサウザンドマスターの功績は素晴らしいものだと思う。彼を殺戮者だと非難する声もあるが、彼の活躍がなければ戦況は膠着しもっと多くの死者が出ていただろう、と大多数の識者は述べている。僕もそう考えているし、だから英雄が生きているとなれば喜ぶべきなのだろうが、しかし。

「ネギがかわいそうですね……」

育児放棄というのはあまり感心できない。アーニヤのお母さんやネカネさんが母親代わりを務めているとはいえ、それもあくまで「代わり」でしかないし。多感な時期の子供にとって、親がいないというのはつらいだろう。

僕は全盛の記憶や精神があるから一人でも大丈夫だったが、ネギは正真正銘の子供だ。サウザンドマスターに対するあこがれもいささか行き過ぎてているくらいがあったし、心配だ。

「そうだね。できれば僕がそばにいてあげたいんだけど、僕もなかなか忙しくてね……」

高畑氏はそう言って顔をしかめた。恩人の息子の役に立てない自

分を責めているのだろうか。

「高畑さんは日本のマホラというところに勤めていると聞いています。そちらのほうでだれか親代わりを探してみるとというのはどうなんでしょう」

学生寮のロビーには様々な雑誌があるが、高畑氏の経歴については以前何かの雑誌で読んだ記憶があった。日本に勤めていると聞いて、ひそかに会ってみたいと思っていたのは内緒だ。

「その案も検討してみたけど、いろいろと事情があつて、ネギ君を日本に連れてくることはできないみたいなんだ」

高畑氏は言葉を濁した。おそらく、僕に言うのははばかられるような政治的事情があるのだろう。高畑氏の横顔はどこか悔しそうに見えた。

「そういえば、高畑さんは日本で教員をやりながら悠久の風にも入ってるんですよ？ 大変じゃないですか、それって？」

アリアドネーの教師たちを見ててわかったことだが、教員というのは決して楽な仕事ではない。それに加えて悠久の風で活動しているというのだから、モーレッツ社員もびっくりなハードでタイトなスケジュールなのだろう。

「最近はそのでもないけど、一昔前は一週間寝ないで働いてたこともあったね。一年前によく戦争の後始末が終わったから、最近は比較的にんびりできてるよ」

「い、一週間……」

陽気に笑っているが、やはり高畑氏は只者ではなかった。

4話

午前十時ちょうどに、僕たちは転移符を使ってネギたちが入院しているという病院まで転移してきた。護衛のレミーには病院の外で待機してもらっている。高畑氏と僕は病院に入り、ネギとネカネさんがいる病室の前に立っていた。

高畑氏が病室のドアを開けると、こちらに気づいた二人が声をかけてきた。

「こんにちは、高畑さん、デレク君」

「こんにちは、デレク、タカミチ！」

高畑さんと僕はネギたちに挨拶を返し、見舞い客用の椅子に腰掛けた。

ネカネさんのほうはまだ気だるそうだが、ネギはすっかり元気なようだ。

ふと見ると、ネギのベッドに大きな木の杖が立てかけられていた。なかなか使い込まれており、細かい傷がところどころについている。けっこうな魔力を感じるが、いったいどうしたのだろうか。ネギはこんな杖を持っていなかったはずだ。

僕がいぶかしげに杖を見ていると、それに気づいたネギがうれしそうな顔で言った。

「これ、父さんに助けてもらったときに父さんがくれた杖なんだ！
父さんが助けてくれた話、聞きたい？」

なるほど、高畑氏が「サウザンドマスターは生きている」といったのはこういうことか。しかしまあ、何で今になって村に現れたりしたんだろつか。

「ああ、聞かせてくれたらうれしいな」

「あのね、僕が湖で遊んでるときに村のほうで火があがってるのが見えたんだけど……」

僕が答えると、ネギは話し始めた。高畑氏もネギからは聞いていなかったのか、興味深げな顔をして聞き入っている。

村の人々が石にされているのを見たくだりについては流石に悲しそうな顔をしたが、サウザンドマスターが助けに来てくれたくだりにさしかかるととてもうれしそうな顔をして離し始めた。ところどころネカネさんが補足をし、熱くなりがちなネギを抑えている。

「……というわけで、父さんはこの杖を僕にくれて、それから空の向こうに飛んでいったんだ」

話し終わると、ネギは少し疲れた様子だったがとても満足げな顔をしていた。どうやら、誰かに聞かせたくてうずうずしていたらしい。

「なるほど、それじゃあいつかまたナギさんに会えるかもしれないね」

「うん、僕もマジステル・マジになってお父さんに会いに行くんだ」

高畑氏の言葉に大きくうなづき、ネギは瞳を輝かせて将来の夢を語った。

「マギステル・マギといえはネギ君、そろそろ魔法学校に入学してもいいころなんじゃないかな？ ほら、メルディアナには寮もあるし……あそこの校長先生も歓迎してくれるって言うたから、ちょっと考えてみてくれないかな？」

メルディアナ魔法学校、か。僕も今の学校に行く前には在籍していたし、あそこの先生方はみな気立てのいい立派な人たちだ。この年から寮に入るというのもつらいものがあるかもしれないが、下手なところに送られるよりはよほどましだろう。

「メルディアナ、かあ……姉さんはどう思う？」

「私はいいことだと思うわ。あそこの先生方はとても暖かい人たちだし、ネギならがんばれると思う」

少しだけ悩むそぶりを見せてからネカネさんは答えた。たしか、彼女もあそこの卒業生だったはずだ。

ネカネ姉さんの言葉を聞き、ネギは入学を決心したようだった。

「それじゃあ、そこに入学することにするよ。えっと、いろんな手続きとかは……」

「ああ、それは僕が済ませておくよ。あとでメルディアナの校長を呼ぶから、説明を受けるといい」

高畑氏が言った。

「何から何まで、ありがとうございます。ここ入院費についてはあとでお返ししますので……」

ネカネさんが高畑氏に深々と頭を下げ、感謝の言葉を述べる。

「いいんだよ、お金は有り余ってるから。それより、今日の朝ロンドンでケーキを買ってきたんだ。みんなで食べようじゃないか」

高畑氏は手を振ってネカネさんの言葉をさえぎり、スーツのポケットから高級そうなケーキの箱を取り出した。どうやら、僕のかばんと同じように内部の空間が拡張されているポケットらしい。なかなか便利そうだ。

「僕チヨコケーキがいい！」

少しうとうとし始めたネギだったが、高畑氏がケーキを取り出すと目を見開いて背筋を伸ばした。ネカネさんと高畑氏、僕は思わず苦笑する。

病室の隅においてあったテーブルを運び、4人でテーブルを囲む。各々が好きなケーキを取ると、僕たちは他愛もない雑談に花を咲かせ始めた。

時計の針がまもなく正午を知らせるころ、僕と高畑さんはそろそろ病室を出ることにした。椅子やテーブルを片付け、花の水をとりかえてから外へ出る準備をする。高畑さんは古びた白いトレンチコートを、僕は防寒の魔法がかかった黒いマントを羽織った。

「じゃあ、今日はこれで失礼させてもらおうよ。二人とも、お大事にね」

「ゆっくり休んでね、二人とも」

ベッドに横になった二人と挨拶を交わし、僕と高畑氏は病室を出た。

「思ったより元気そうでしたね、ネカネさんたち」

病院の廊下を歩きながら僕がそういうと、高畑氏は答えた。

「この病院の魔法医は優秀だし、高価な魔法役も使ったからね。あと5日もすれば、二人とも退院できるそうだし」

大方、この人のポケットマネーで買い求めた薬だろう。お金には余裕があるといっていたらしいし、うらやましいことだ。悠久の風は有給ではないそうだから、マホラの教員というのはよほど給料がいいのだろう。少し、惹かれる。

「ところで、スタンさんたちはどうなんでしょうか。治療薬は見つかりそうなんですか？」

「いや、爵位級の悪魔が施した石化術らしくてね、人間界には治療薬が見つからないそうだ。いま、治療形のアーティファクトを持ったミニステル・マギに片っ端からあたつてるところだね」

爵位級。悪魔の中でもきわめて強力な連中で、これと契約できる術士はごくごくわずかだ。先の戦争で召喚術士はだいたい半数を減らしたらしく、いまはほとんどいないとか。軍事的には召喚術士というのはきわめて厄介な性質を持つので、両軍は目の色を変えて敵方の召喚術士を狩りまくつたらしい。契約はできなくても使役はできる、というレベルの術者が今の魔法界では最高位の召喚術士だ。

契約によらない使役の場合、通常の数十倍の報酬を用意する必要がある。爵位級悪魔との交渉では通常の契約による報酬もかなりの額になるというから、契約によらない使役をできるのはごくごくわずかな金持ちか権力者だけだろう。

自分の才能がどこまであるかはわからないが、しかし。

あるいは僕ならば、爵位級の悪魔との契約ができるだけの力を身につけられるのではないだろうか。

爵位級の悪魔による石化を解除できるほどのアーティファクトなど、存在するかもどうかもわからない。戦前にはあつたかもしれないが、戦争を通じて多くの強力な魔法使いや従者が死んでしまった。いまこの世界にそういうアーティファクトがあるかどうかと問われれば、大方の人間はないと答えるだろう。僕もそう思う。

「………そうですか。見つかるといいですね」

僕の心中を見透かしたかのように、高畑氏は優しげな目をして言った。

「君はまだまだ子供だ。石にされた人たちのことは大人が何とかするから、君が責任を感じる必要はないんだよ」

責任、そんなものは感じていない。お世話になった村の人たちを助けたいというのは、いうならば人情とか義とか、そういうものだろう。

「僕もできるかぎりのはしりたいと思ってるんです。それに、魔法の勉強は楽しいですし」

「勉強が楽しい、か。まったく、僕の生徒たちに聞かせてやりたいね」

ははは、と二人で笑う。どうやら、いつの時代も教育者というものは生徒のやる気を引き出すのに苦労するらしい。

「じゃあ、僕はこの後メルディアナの校長と話すんだけど……デレク君はどうする？」

「僕もあそこの校長先生にはお世話になりましたから、できれば少しお話をしたいと思います。大丈夫ですか？」

「うん、今回は聞かれて困る話じゃないからね」

聞かれると困る話をしたことがあるのか。

「いやまあ冗談だけど。お、うわさをすれば」

高畑氏がそういった次の瞬間、廊下の角からメルディアナの校長が現れた。

「お久しぶりです、校長先生」

高畑氏が先に話しているよとばかりに目配せをしたので、僕は前に進み出てメルディアナの校長。に挨拶した。

「おお、デレク君か。元気にやっとなるかね」

「おかげさまで元気に過ごしております。その節は本当にお世話になりました」

メルディアナの校長は高位の召喚術士で、僕は散々お世話になった。授業のレベルを逸脱した質問にも快く答えてくれるいい先生なので、どの生徒からも慕われている。

「私があげた本は役に立ってるか？ 少し古い本だったが……」

「ええ、あの本にはすごくお世話になってます。わかりやすいですし、いい本だと思いますよ」

卒業祝いにもらった召喚術の本は、下級から中級悪魔の召喚に対応した解説書だ。実践的な内容で図も結構ついているので、何度か読み返している。

「それはよかった。これからも精進したまえ、デレクよ」

「はい、先生」

校長先生は満足げにうなづき、高畑氏に眼を向けた。

「おお、高畑さん。わざわざ来ていただき、感謝いたしますぞ」

「頭を上げてください、僕も好きでやってることですから。ところで、ネギの入学についてなんですが……」

二人が話し始めると、僕はどうにも手持ち無沙汰になったので窓の外に目を向けてみた。

今日はこの後ロンドンで一泊して、明日の朝に学校に変える予定だそうだ。高畑氏にはロンドンの観光でもしてきたらどうだと言われたものの、魔法の勉強がしたくなってきたので一刻も早く学校に帰りたかったりする。

魔法の勉強は本当に楽しい。いまやってるラテン語は英語と似ているところがあるので学習は楽だし、古代ギリシャ語は先生が愉快な人なので勉強に力が入る。マジックアイテムの作成は半ば趣味のようなものだし、魔方陣もジグゾーパズルみたいなものだと思えばそこそこ楽しめる。それに、なんといつても上達が実感できるところがいい。召喚術への適正は結構なものらしく、この前のテストでは召喚術履修者のなかでもトップの成績をとった。日本人だったときにも経験したことだが、勉強というのは自分がいい成績をとれている間は楽しいものだ。ほかの人間は知らないが、少なくとも僕に関しては成績上位者でいる間は勉強のモチベーションはうなぎのぼりだ。

そんなことを考えていると、高畑氏と校長の話は終わったようだ

つ
た。

5話

ロンドンに宿泊した次の日、僕は寮の自室へと帰ってきた。

時刻は正午、昼食はゲート近くの売店でサンドイッチを食べた。魔法世界の食べ物はどうも舌に合わないが、ゲート近くの店ではあちらの食品もたくさん売っているので助かった。

トランクをあけ、荷物を整理する。

今は冬期休暇中だから授業はないが、もちろん課題は出ているし例え課題がなくても魔法の勉強は欠かしたくない。高畑氏はほどほどにしろといっていたが、僕自身はもっと勉強に打ち込みたいと考えている。

悪魔を召喚する際に用いる魔方陣は、通常ラテン語で描かれることが多い。だが、上位の術者は古典ギリシャ語とルーン文字を組み合わせた魔方陣を用いるし、上級あるいは爵位級の悪魔との契約にはそちらを用いるのが普通だ。悪魔をこちらの世界にとどめるのに必要な魔力も少なくてすむし、なにより悪魔に対する拘束力が違う。より高度な知識と魔力制御を必要とするが、爵位級悪魔との契約を目指す僕にとっては避けて通れない道だ。

魔方陣に書かれた言葉や紋章の細かい働きを理解しなければ魔法人の力を最大限に引き出すことはできないし、それに魔方陣というのは自分の属性や魔力量、呼び出す相手の性質や真名などによって細かい修正をしなければならぬ。たとえ模様を丸暗記したところで使いものにはならないのだ。

属性といえば。

僕の属性は水属性である。直接的な攻撃力には欠けるが、絡め手や支援に力を発揮する魔法が多い。

魔法障壁というものがあるが、これには大きく分けて二つある。ひとつは魔力を何らかの物理的な作用として発現させて相手の攻撃を防ぐものと、魔力によって魔方陣を描き、その働きによって攻撃を防ぐものだ。

水属性は、考えればわかると思うが前者のタイプの障壁を構成するのは苦手だ。しかし空気中の水を操って魔方陣を描くのは得意だし、多くの魔法使いはそうした防御術を使っているという。

僕がいま研究しているのは、魔力を流し込んだ水銀を操る魔法だ。この魔法の使い手は大戦でほとんど死亡しており、いまや教本に載っているのみなのだが、興味深い魔法だと思う。液体を操る魔法であるために水属性の僕とは相性がよく、攻撃・防御ともに優れた魔法でもあるため何かと役に立つだろう。

問題は、いちいち手動で操作しなければならない点だ。

大戦でこの魔法を活用した魔法使いたちは降霊術によって水銀に霊魂を宿らせ、自動で攻撃や防御を発動するようにしていたらしいが、僕は降霊術に関しては門外漢もいところなのだ。

まあ、手動で動かしても十分に強い魔法だ。自動で動かす術は今後も継続して探そうとは思っているが、そこまで優先順位の高い研究ではない。

基本的に戦闘は行いたくもないが、しかし魔法使いとして生きる以上戦いは避けて通れない道、らしい。戦争が起これば駆り出されるだろうし、魔法使いというものに対して恨みを持った集団もいる。

また、僕は遠縁とはいえサウザンドマスターの血族だ。叔父に恨みを持った連中に襲撃される可能性も捨てきれない。

いくら優秀な悪魔と契約しているとはいえ、やはり自衛のための魔法も覚えておきたい。攻撃魔法は決して必要ではないが、障壁や索敵の魔法はあったほうがいいだろう。そういう意味で、水銀の魔法は僕にとってちょうどいいのだ。

高畑氏が少しだけ言っていたが、魔法世界にはまだまだ紛争の種がころがっており、ちょっとしたきっかけでいつ戦争が起ころかわからないのだとか。アリアドネーで研究員をやるのはよさそうだと考えていたが、戦争が起これば徴兵されることは目に見えている。できれば、卒業後はあちらの世界で就職したほうがいいだろう。おっぴらに魔法を使えないのは不便かもしれないが、その分あちらの世界には科学文明がある。生活水準はそう変わらないだろう。

だが、あちらの世界で魔法の技術を生かして仕事をすると働き口は早々見つからない。要人警護の仕事は実入りがいいと聞いたが、僕には向いていないように思う。やはり、戦争の危険は承知でアリアドネーで研究員をやるのが一番なのだろうか。将来についての悩み事は尽きない。

優先順位の高い研究といえば、古典ギリシャ語とルーン文字の学習こそがいま最も優先順位の高い研究だ。

銃器の加工やマジックアイテムの製作を通じて金をもうけ、そこから生活費を差し引いて残った金は魔法の研究に注ぎ込まれることになる。魔法の研究というのはお金がかかるし、マジックアイテムの材料費も馬鹿にならない。

宝石や貴金属をマジックアイテムの原料として使用すればそれだけ効果の高いものが出来上がるし、魔方陣を描くにしてもただのインクとドラゴンの血液ではわけが違う。杖も性能の高いものを自作するなら樹齢2000年の霊樹の枝を使用したり強力な魔力を持つ

宝玉を埋め込んだりしなくてはならないし、お金はいくらあっても足りないのだ。まあ、マジックアイテムというのは総じて長持ちする。必要なものをそろえてしまえば、その後はお金もたまりやすくなるかもしれない。

そんなことを考えながら本棚に手を伸ばした僕は、古典ギリシャ語の入門書を開いて勉強を始めた。

夜の八時になり、ようやく一日の勉強ノルマが終わった。語学とというのはやればやっただけ成長が実感できるので、数学や歴史などといった学問に比べてモチベーションが上がりやすいのだ。大きくあくびをしたあと、僕は外に夕食を食べに行くことにした。

アリアドネーでは比較的外食産業が発展しており、向こうの世界の料理を出す店も多い。僕がいま向かっている店も、通には有名なラーメン屋だ。ラテン語の先生が教えてくれた店で、あっさりした味付けが食べやすいと評判を呼んでいるらしい。先生はしょうゆラーメンを勧めていたが、僕は塩ラーメンのほうが好きだ。

二ヶ月前から週に五度の頻度で通いつめており、座高の問題で力

ウンターに座れない僕のために特別性のクッションが置いてある。空いている店内に入って店主からクッションを受け取ってカウンターに座り、お冷に口をつけてからコップをカウンターに置いた。カウンターのの中では中年の店長が麺を茹でている。名前はまだ聞いていないが、顔立ちは東洋人のそれだ。

ごとり、と塩ラーメンがカウンターに置かれる。僕ではなく、隣の客に出されたものだ。右隣に座っている初老の魔法使いは割り箸を割って、ラーメンを食べ始めた。

ほどなくして僕にも塩ラーメンが出され、僕もまた割り箸を割ってラーメンをすすりだした。相変わらず塩加減が絶妙で、あっさりとしているためにスープも飲みやすい。麺は平均的な太さで柔らかさもちようどよく、僕は夢中になってラーメンをすすった。

魔法の研究というのはけっこうエネルギーを消耗するので、必然的に腹が減る。ここのラーメンはそこそこ量があるほうだが、僕と隣の魔法使いはスープを完飲し、同時にお冷の入ったコップを手にとった。

「ごちそうさまでした」

店主にそう言って、カウンターを拭いてから店を出る。

「さて、帰ったら勉強するか寝るか、どうしようかな……」

少し疲れた。帰ったら真っ先に寮の共同風呂に入って寝てしまうのもいいかもしれない、などと思っていると後ろから声をかけられた。

「まだ日付も変わってないじゃないか、この時間に寝るなどなんともつたいない時間の使い方だ。勉強したまえ、若者よ」

振り返ると、ラーメン屋で隣に座っていた初老の魔法使いだった。

「年をとった今だからこそわかるがな、十代までが一番無理が利く年頃なのだ。多少体を壊してでも、やりたい研究に打ち込んでおいたほうがいい」

「あの、あなたは……？」

初老の魔法使いは名前も名乗らずに何事かを言い始めた。僕が名前を聞くと、驚いたかのように立ち止まって答える。

「私を知らんのか？ アリアドネー大学副総長のレイモンド・ランカスターだ」

「これは失礼しました。なにぶんこちらへ来てまだ日が浅いもので申し遅れましたが、僕はデレク・スプリングフィールドです」

只者ではなさそうな雰囲気の人だったが、まさかそんなお偉いさんだったとは。そういわれれば確かに、偉大な魔法使いっぽい雰囲気があるような気がする。

「君にはわからないかもしれないが、若いうちに学んだことは一生忘れないものなのだ。この街には優秀な学者もすばらしい資料もある、留学生なら寝る間を惜しんで勉強に励みなさい」

言われてみればそうかもしれない。記憶力は年をとるとともに衰えていくというし、僕が留学できたのはスタンさんをはじめとする

村の面々が資金援助をしてくれたからだ。それに、向こうの世界にはアリアドネーほど優秀な人材がそろっている場所はほとんどないだろう。無為に時間を過ごすのはもったいないかもしれない。

「なるほど、確かにそうですね。では、今日は早く帰って勉強することになります」

「うむ、励めよ若者。いまが最も伸びる時期だ」

「ご教授ありがとうございます。では」

よし、これからはもっと勉強に打ち込もう。基本的にはそう簡単に人を信用しない僕だが、ランカスター氏の説教は僕にそう思わせるだけの強い何かがあった。

ランカスター氏に頭を下げ、僕は寮へと急いだのだった。

6話

アリアドネーに入学してから六年後、僕はアリアドネー大学の最終学年になっていた。

六年をこの街で過ごし、僕はこの街でも最高クラスの召喚術士になっていた。召喚術の技量もかなり成長したが、魔力量に限ればこの街の召喚術士の中でもトップだろう。古典ギリシャ語とラテン語も読み書きは完璧だし、マジックアイテム作成の技術もだいぶ上がった。

再来月に提出する卒業論文のテーマは「爵位級悪魔の召喚と契約について」。すでに理論と専用の術式・魔方陣は出来上がっており、あとは召喚と契約を済ませれば卒業資格を手に行ける。召喚する悪魔についてもすでに文献を読み漁って決めた。話によると故郷を襲った悪魔は伯爵級が最上位だったとのことなので、念には念を入れて侯爵級の悪魔を召喚するつもりだ。アリアドネーではここ数年行われていなかったような大魔術になるだろう。

爵位級悪魔の召喚というだけならそこそこの力を持った術士ならできないことはないが、しかし爵位級悪魔との契約ともなれば戦争が終結して以来、成し遂げたものはいない。

自作の杖を持ち、魔法がかかったかばんに武器類を詰めて、僕は住んでいるアパートから出た。向かう先は魔法世界でも辺境のほうに位置する溪谷で、ブラックドラゴンの目撃情報が入っている場所だ。

ドラゴンというのは財宝を貯めこむ性質がある。爵位級悪魔の召喚を控えた僕は、ドラゴンの持つ宝石類や貴金属、貴重なマジック

アイテムを奪って召喚術に使用するつもりなのだ。すでに件のブラックドラゴンには懸賞金がかけられており、心おきなく狩ることができる。

ドラゴンが出る場所の近辺に転移できる転移符を懐から取り出し、魔力を流し込んで使用する。転移符を自作できる程度の技術力はないが、ここ数年で貯金はそれなりにたまった。早期リタイアして穏やかな老後生活を送るにはまだまだ足りない額だが、転移符くらいならなんとかなる。

件のドラゴンにはこれまでさまざまな魔法使いやトレジャーハンターが挑んだらしいが、それらはほぼ全滅。生き残った魔法使いの証言によると、ドラゴンの中でも強大な方だという。

まあ、心配は要らないだろう。ルーンによる加工を施した重火器やマジック・アイテムに、10体の上級悪魔と悪魔を組み込んだ水銀。これらの兵装を駆使して戦えば十分に勝ち目はあるはずだ。銃の弾丸にはひとつ残らず魔法的な加工を施してあるし、今回の討伐に投入する兵装は武器商人に売れば1億円近くにもなるくらいだ。ここまで抜かりなく準備をして負けようものなら、僕はとんだ愚か者だ。

とはいえ。

やはり初めての实战ともなれば緊張するもので、精神が高揚するクスリを少量摂取しているとはいえないやな汗が出てしまう。

契約した10体の上級悪魔は現地で召喚する予定だ。腕時計を見て時刻を確認した僕は、深呼吸をしてから転移符を発動させた。

現地に着いた僕は、契約した悪魔たちを現界させるべく呪文を唱えはじめた。

独特の抑揚に気をつけながら呪文を唱えつつ、コートの内ポケットから試験管を取り出し、魔法で拡張された空間から水銀を取り出す。約30リットルもの水銀が試験管から出てくると、僕は水銀に魔力を通して悪魔を現界させるための魔方陣を描いた。

水ではなく水銀を用いることの利点の一つとして、いつでもどこでも強力で精密な魔方陣を準備できるということが挙げられる。いま使っている水銀には洗脳して意思を奪った下級悪魔を溶かして混ぜ込んでおり、暗示や催眠を用いることによって自動防御の機能を植えた。当初は動きも悪く反応も遅かったために失敗したかと恐れたのだが、半年ほどがたつと非常に優秀な兵装として進化してくれた。溶かし込んだ悪魔は魔界でも罪を重ねて扱いに困っていたという曲者だったので、倫理的にも問題はない。

ただ、防御に特化させた代償として攻撃性能は犠牲になった。せいぜい、人の腕くらいの太さの水銀の鞭を振り回すくらいだ。水銀は重いため当たればそこそこ効くかもしれないが、攻撃動作が遅すぎてまず当てることは無理だろう。まあ、自動防御の兵装としては十分に優秀なのだから不満を言っても仕方ないが。

魔力を流し込むと半径5mほどの魔方陣が赤く発光し、次の瞬間

には10体の上級悪魔が出現した。

「じゃあ、これからブラックドラゴンの討伐を始めよう。前回の打ち合わせどおりに振舞ってくれ」

「了解した」

10体のリーダーを務めるがっしりとした体格の悪魔がそう言うとお辞儀をすると、他のものも僕に対して恭しくお辞儀をした。僕はかばんからいくつかの重火器を取り出し、悪魔たちに手渡す。

「使い切ったら捨ててくれてかまわない。使い方はわかるな？」

悪魔たちに手渡したのは、紛争地帯でテロ組織から奪取させたRPG-7だ。ドラゴンの障壁を抜くために強力なルーンによって加工を施してあり、一発でドラゴンの鱗を貫けるはずだ。今回の作戦の要であり、非常に金がかかっているので当ててもらわなければ困る。

RPG-7を担いだ悪魔たちは空に飛び立ち、ブラックドラゴンを探すために散開した。発見し次第念話でその旨を伝えるように言うてあるので、僕はここで待機する手はずだ。

悪魔たちが散開して10分ほどが経ったころ、一体の悪魔から念話が届いた。

『こちらナンバーエイト、東南東の溪谷にてドラゴンを確認。どうやら寝ているようです』

念話は全員に届いたらしく、悪魔たちが詳しく問い詰めはじめた。集中を乱されるのはいやなので、念話を切って向こうへ向かう準備をする。

水銀を再び試験管に戻し、右手の杖を掲げて 水の転移門 の魔法を行使する。召喚した悪魔の場所はわかるので、転移によって移動するのが最も手早いのだ。

足元に水たまりが現れた次の瞬間、僕はドラゴンを発見した悪魔の近くに転移した。ほかの悪魔たちは僕が転移したことを感じ取ったようので、僕に続いて転移してきた。

「うわ、これはまたなんとというか……」

ドラゴンは自分の財宝の山の上で寝ているようだった。金銀財宝を積み上げ、その上に自らの巨体を乗せている。非常に悪趣味で、しかしどこか荘厳な光景だった。

「じゃあ、手はずどおりに打ち込んでくれ」

すでに僕たちの魔力を感じ取ったのか、ドラゴンは身じろぎして低くうなった。少しの焦りを感じた僕は、臨戦態勢の悪魔たちに命令した。

10体の上級悪魔が翼を広げて飛び立ち、RPG-7を構えて慎重にドラゴンへと近づいていく。

僕もかばんから改造済みの対物ライフルを取り出し、ドラゴンに照準を合わせた。一発限りの銃だが、威力はすさまじい。

悪魔たちが慎重に降下し、そろそろ発射するかと思われたその時、ブラックドラゴンは飛び起きて咆哮した。500mは離れていないはずなのに、衝撃が体を襲う。衝撃は障壁で止めたものの、これで奇襲によるメリットはなくなってしまった。

悪魔たちがRPG-7を発射し、対戦車榴弾が四方八方からドラゴンに襲い掛かる。

ドラゴンの天然の障壁を破り、対戦車榴弾が鱗を食い破って炸裂する。ドラゴンが苦悶の叫びを上げるが、悪魔たちはそれぞれ自らの得意とする魔法を唱え始めた。

のた打ち回るドラゴンに照準を合わせると、僕はライフルの引き金を引いた。大口径の弾丸が空を切ってドラゴンに命中し、右目を傷つける。全身から血を流すドラゴンはしかし、翼をうって空へと飛び立った。

かぎ爪と尻尾が不運な悪魔に襲い掛かる。その悪魔がかぎ爪にとられた瞬間、ほかの悪魔たちの魔法がドラゴンに炸裂した。不運な悪魔は巻き添えを喰らい、現界を保てずに魔界へと送還された。

残りの悪魔は9体、ドラゴンは相当な手傷を負っているものの戦意は旺盛なようだ。

対物ライフルを投げ捨て、試験管から水銀を出して接近戦に備える。悪魔たちは善戦しているようだ。やはり上級悪魔ではドラゴンに及ばないようだ。僕が召喚する予定の侯爵級ならばドラゴンなどひねり潰せるだろうが、ないものねだりをしては仕方がない。

水銀を展開し、急襲に備えながら悪魔たちの戦いぶりを観察する。

悪魔たちはどうやら戦いを長引かせ、手傷を負ったドラゴンをじわじわと追い詰める先方を探っているようだ。悪魔らしいといえれば悪魔らしいやり方である。上下左右を囲み、時間差で魔法を放つことによつて知能の低いブラックドラゴンを翻弄している。ドラゴンの鱗は魔法に対してかなりの防御力を持つために魔法は致命傷とはなりえないが、しかし着実にダメージを与えているようだ。

いまもまた悪魔の放つた 雷の暴風 がドラゴンを襲い、無防備な腹に直撃する。鱗が焼け焦げて剥がれ落ちたのを見て、僕は思わずガッツポーズをした。これでようやくまともに攻撃が通るようになる。

悪魔たちも鱗が取れたことに気づいたようで、ここぞとばかりに集中砲火を浴びせにかかった。雷撃が炸裂し、炎が襲い掛かり、鋭い氷剣が飛来してドラゴンの腹に突き刺される。

ドラゴンはなす術もなくやられ、今度は力を振り絞って逃げようとした。

『逃がしますか？』

『いや、追え』

リーダー格の悪魔からの念話に答え、僕はドラゴンのコレクションの元へと走りよる。逃げるドラゴンは悪魔たちが追っているのにじきに始末するだろう。どうやら、今回の戦いは首尾よく行ったようだ。

僕はほくそ笑むと、竜の財宝へと手を伸ばした。

ドラゴンの財宝と懸賞金は、合計金額を日本円に換算するとおよそ200億円ほどにもなるくらいだった。が、そのほとんどは侯爵級悪魔の召喚のために費やされてしまい、手元に残った金額は日本円に換算しておよそ10億円ほどだった。

いま僕は大学の広間を借り、侯爵級の悪魔を召喚するための巨大な魔方陣を設置しているところだ。魔方陣を描くのに使用するのは竜の血と溶かした金を混ぜた液体で、魔方陣の各所には魔力のこもった宝石が置かれている。これらは契約が終われば砕けて魔力を失ってしまうため、実質的には宝石を使い捨てにしているに等しい。

広間の中に人はいないが、窓の外から魔法世界のマスコミがカメラを向けている。戦後初めての爵位級悪魔との契約ということで、僕が英雄の親戚だということもあって取材の人間が押しかけてきているのだ。ずうずうしくも広間の中に押し入ろうとする連中の相手

をするのは思いのほか疲れたが、泣き言を言っている場合ではない。

アリアドネーに着てから六年。すでに十六歳になったが、これだようやくスタンさんたちを助けることができる。

輝かしい展望を胸に、僕は召喚の詠唱を始めたのだった。

6話（後書き）

あと3話ほどで原作開始です。いましばらくお待ちください。

7話（前書き）

皆様からの簡素・メッセージなど、大変励みになっております。これからもよろしくお願いします。

7話

「地這う暗黒の者、静寂の闇に声を響かす者。我は其を従えるもの。古の法に従いて、今ひとたび漆黒の世界に通じる門を開かん……」

古典ギリシャ語で呪文を詠み上げ、魔方陣に魔力を流す。ルーン文字が魔力に反応して赤く輝き始め、置かれた宝石から古代の魔力が流れ出す。

「其は高貴なる者、気高く誇りを抱きし者。暗黒の底で眠る者に告ぐ、我の声を聞くべし」

魔界の奥深くに眠るといふ侯爵級悪魔、ベルンハルト「エーデルシュタイン侯。侯爵級悪魔の中でも強大な力を持つ悪魔であり、剣術と魔法に長けるといふ悪魔だ。記録によれば、最後に現世に召喚されたのはおよそ1500年前。悪魔にしては珍しく争いを好まない性質のため、持っている力の割に魔界での知名度はそれほど高くないのだという。

「いざ扉を開きて、漆黒の暗渠より悪鬼を招かん……我との契約を望むならば出でよ、ベルンハルト「エーデルシュタイン！」

最後の一節を唱えると、莫大な量の魔力が体から流れ出すのを感じた。同時に魔方陣が直視できないほどに輝き始め、置かれた宝石

の輝きもいつそう強まる。光が目を焼くが、じつと耐えながら魔方陣の中央を凝視していると、やがて魔方陣の上の空間がゆがみ始めた。

ゆがんだ空間に魔方陣の放つ光が吸い込まれていく。輝いていた宝石は徐々に曇っていき、いくつかのものにはひびが入り始めた。

魔法陣の光が収まった瞬間、魔方陣の中央に突如として背の高い男が出現した。

身長はおよそ180cmほどで、上等そうな黒いマントを羽織っている。服もまた一目見て高級品だとわかるつくりで、そして腰には一振りのレイピアを下げていた。

羽のついた気障な帽子をかぶっているが、滑稽さはない。むしろ男の気品をいつそう高めているようだ。

顔立ちは整っており、見た目は20代後半といったところか。

「ベルンハルト＝エーデルシュタイン侯爵か？」

召喚されたばかりの悪魔に対して、僕はそう問いかけた。

僕と対峙する悪魔はすさまじいまでのプレッシャーを放っている。わざとそうしているのか素でこうなのかはわからないが、先日のブラクドラゴンより数段は格上だろう。

伶俐な視線がこちらを向き、目が合った瞬間背筋に悪寒が走る。魔方陣は万全なはずだが、この悪魔が本気を出せば破れてしまいうな予感がした。

「汝が私を召喚せし者か。汝は我に何を望む？」

低い声で悪魔は僕に問いかけた。詰問するわけでもなくただ質問されただけなのに、僕は土下座して謝りたい衝動に駆られた。が、意志の力でそれを抑え込み何とか答える。

「僕はデレク・スプリングフィールド。君を召喚したのは恩人を助けるためと、僕の護衛だ」

「弱き者よ、汝に私を従える器量があると思っっているのか？」

平坦な口調で悪魔は問いかけてくる。

「器量は知らないが、実力はある。契約に応じよ、侯爵」

悪魔の目をしっかりと見据え、命令する。召喚に応じた以上は魔方阵に拘束されるのだから、恐れることは何もないと己に言い聞かせながら。

沈黙が場を支配する。悪魔はなにやら考え込んでいる様子を見せたかと思うと、次の瞬間には言い放った。

「よかろう。汝をわが主人と認め、契約を交わそう」

悪魔は虚空に指を這わせたかと思うと一枚の古びた羊皮紙を取り出し、僕に差し出した。

侯爵が素直に応じたことにうれしく思い、魔法陣の中に手を伸ばして契約書を受け取る。ざっと目を通した僕はあらかじめ準備しておいたナイフで親指を切り、羽ペンに血をつけて契約書に署名をした。

署名した契約書は赤く発光し、次の瞬間には消えうせた。契約がなされたことよって僕の中からさらに魔力が流れ出し、ベルンハルトを現世にとどめるために消費される。

「ではこれからよろしく頼む、ベルンハルト」

「了解した、小さき者よ。汝の身は私が守ろう」

うなづきあった僕と悪魔は、お互いにながちりと握手を交わした。その瞬間にカメラのフラッシュがいつせいに焚かれ、大魔術の成功に興奮した学長や教授、マスコミが広間に押し入ってきた。

「本当におめでとう、スプリングフィールド君。君はわが大学の誇りだよ、明日の一面記事は間違いなく君の事で埋め尽くされるだろう」

「ありがとうございます、学長。広間を貸してくれたこと、感謝します」

「なに、優秀な学生には惜しみなく援助をするのが教育者というものだ」

マスコミのインタビュー攻勢をしのいだ後、僕はアリアドナー大学の学長室で学長と対面していた。

「しかし、これからはどうするのかね？ できれば卒業後は本学で教鞭をとってもらいたいと思っているのだが……」

「まずは故郷の村の人たちの治療が先決ですね。先ほど尋ねたところ、ベルンハルトは解呪もできるとのことでしたから。明日一番でイギリスに飛ぼうと思います」

「だが、卒業後はどうするのだ？ 君ほどの術士であれば世界中のさまざまな組織からオファーが来ると思うが、進路はどうなんだね」

正直、研究が面白すぎて進路について具体的なことは何も考えていない。が、やりたいことは見えてはいる。

「そうですね、教職に興味があるのですが……なにぶん教育に関しては何も勉強していないもので」

高畑さんや副学長、学長といった立派な教育者に接することが多かったせいか、いつのころからか教職というものに憧れを持つようになった。幸い人前で話すのは得意なほうだし、まだ学資に余裕はあるから教員免許をとるだけの期間大学に在籍することは不可能ではないだろう。

「なるほど、教師か。それなら、わが大学の教育学部に編入するといい。授業料は全面的に免除しよう」

「いいのですか？」

「なに、次世代に対する投資だと思えば安いものだ。それに、今回の件でますます本学の評判は上がるだろう。君の成してくれたことに比べれば、授業料の免除などではむしろ足りないくらいだ」

「ありがとうございます」

上機嫌に話す学長に感謝する。

「君の勤勉さがあれば免許の取得は一年もあれば済むだろう、期待してるぞ後輩よ」

愉快そうに微笑む学長に重ねて礼を言い、学長室を辞去する。

転移魔法を使ってアパートに戻ると、部屋ではベルンハルトが待機していた。

「調子はどうだ、こっちは久しぶりなんだろう？」

「私が隠棲している間に随分と人間の世は変わったのだな、朋輩から話には聞いていたがやはり驚きは大きい」

隠棲。なんと素敵な響きだろうか。きっとこの悪魔とは気が合うだろう、そんな予感がする。

「ここなんかまだまだローテクさ、あちらの世界の日本という国なんかもつとすごいぞ」

「それは見てみたいものだな。ところで、明日は何時に発つのだ？」

「朝の六時に出発だ。本当に治せるんだよな」

「もちろん、たかだか伯爵級程度の魔法が解けぬほど私は落ちぶれてない」

「そうか、なら安心だな」

「ああ、貴君は座って眺めてるだけでいいさ」

ほとんどの悪魔は召喚した術者に対して敬語を使うものだが、ベルンハルトに限っては敬語を使うことをしなかった。まあ、それこそ本気を出せば対戦の英雄と同等の力を持つといわれる悪魔なのだ。召喚術式で現世にとどめている以上本来のスペックを十分に発揮することはできないのが悪魔というものだが、それでもベルンハルトは規格外の強さを誇るのだろう。争いことは好むところではないと言っていたが、むしろ護衛としては望ましい気質だ。

それにしても、僕もそろそろ将来のことを考えなければいけない時期か。

飛び級を何度か繰り返して16歳で大学の最終学年にまではなったものの、研究一筋だったせいかわ世の中のことには疎い。大学の연구원として生きていくならばいいのだろうが、しかしこのままアリアドネーで一生を過ごすのも何か物足りない気がする。

同期の連中はほとんどが内定を取っており、内定を取っていない連中は全員大学院に行くのだという。アリアドネー大学は日本で言う東大みたいなものだから、卒業生は皆優秀だ。

日本といえば。

僕もそろそろ日本が恋しくなってきた。先日、大学の近所にうまいてんぷら屋が出来たのをきっかけに日本の生活が懐かしくなってきたのだ。アリアドネーでの生活に不満があるわけではないが、やはりどこか物足りないものはある。

まあ、すでに出来上がってる卒業論文を提出しさえすれば卒業できるのだ。新学期の開始は二カ月後だから、スタンさんたちの解呪を済ませた後は日本に観光に行くのもいいかもしれない。

「そういえば、霊体化なるものができるって文献にはあったけど、それ本当？」

旅支度を終えて荷物をトランクに詰め込んだ僕は、ふと気になってベルンハルトにたずねた。

「ああ、霊体化か。できるが、それがどうしたのか？」

真顔で聞き返してきた悪魔に、僕は答えた。

「いや、いままで会ってきた悪魔にはできるのがいなかったからね。少し気になったんだ」

「まあ、今は失われた技術だからな。昔ならば爵位級の悪魔はみなかったものだが、最近の爵位級には霊体化できない者もいると聞く」

霊体化とは、平たく言えば幽霊状態になるということだ。物理的な干渉を一切無効化して透明になる代わりに、現世のものへの干渉もできなくなる。常に術者のそばに待機できる上に魔力の消費も抑えられるので、何かと重宝する技術だ。

「じゃあ、明日は目的地に着くまでは霊体化してついてきてくれ。」

マスコミに見つかる困るから、少し変装していくつもりなんだ」

「了解した」

時刻はすでに深夜。明日に備えて、そろそろ眠りにつくべきだろう。

「僕は寝ることにするよ。おやすみ」

「いい夢を」

そのまま僕は寝室のベッドに横になり、すぐに意識を手放したのだった。

8話

故郷の村人たちの石像は、メルディアナ魔法学校の地下室に安置されている。メルディアナの校長はこのあたりの魔法使いの指導的な立場にあるので、行き場のない石像たちを自分の学校の地下へと置いたのだ。

ベルンハルトを従えてメルディアナ魔法学校を訪れると、校門から校長が出てきて地下室まで案内してくれた。もう夏休みに入ったのか、校内に学生の姿はない。

「そういえば、今日の朝刊の記事は見たか？ 一面を丸々使って君のインタビューが載っていたぞ」

地下室までの道を歩いていると、校長がそんなことを言った。

「朝刊はまだ読んでませんが、どうにも気恥ずかしいですね。僕としてはスタンさんたちの治療が終わるまでは気が抜けないので」

「謙虚でよろしい。しかし、数年前の教え子がいまや世界トップクラスの召喚術士とは、なんとも誇らしいものだ。明日はうちにもインタビューが来るといっし、私も鼻が高い」

「やめてくださいよ先生、いまはあれですけど戦前の術士たちに比べればまだまだなんですから」

僕が困ったように言うと、校長は愉快そうに笑った。

地下室に着き、校長に扉の鍵を渡された。

「本当なら私も付き添いたいのだが、あいにくと来客があつてな…
…がんばってくれ、頼むぞ」

「全力を尽くします」

実際に解呪するのはベルンハルトですけどね、と心の中で付け加える。

一階へ戻っていく校長に背を向けて地下室の扉を開け、ベルンハルトを伴って中に入る。

「うっ、これはひどい……」

村人たちの石像は想像を絶するほどにおぞましいものだった。

ただの石像とはわけが違つ。なにせ、生きた人間がそのまま石像にされたのだ。恐ろしいほどにリアルだし、なによりどの村人の表情も恐怖や苦痛を感じさせるものなのだ。まさに悪魔の所業である。

「どう、解けそうか？」

僕から見れば未知の術式でちんぷんかんぷんなのだが、ベルンハルトならば術式を理解できるのだろう。手近な石像に手を触れてから、しばらくして彼は口を開いた。

「術式の構成が未熟だな。百人前後の人間を石化させなければいけなかつたといえ、粗雑に過ぎる。これならば解呪は楽だろう」

ベルンハルトのコメントを聞いて、僕は安堵した。万が一彼が解呪できなかったらどうしようか、という不安もあったのだ。

「全員の解呪にはどれくらいかかるんだ？」

「大規模解呪術を使えば30分で何とかできる。始めていいか？」

「ああ、頼む」

僕がうなづく、ベルンハルトは朗々と呪文を唱え始めた。

空気中の魔力が変質していくのが手に取るようにわかる。魔法陣やルーンを通じて解呪を行っているのではなく、複雑で緻密な構成を変質した魔力によって描くことで解呪術を行使しているのだ。

独特の抑揚で古典ギリシャ語の呪文が詠み上げられ、変質した魔力が渦を巻き始める。ベルンハルトの全身から魔力が流れ出し、空気中の変質した魔力と結合してなんともいえない異質な魔力が形成され始めた。

どれほどの時間、そうしていただろうか。

20分ほど詠唱が続くと、地下室の空気は気分が悪くなるくらいに濃くなっていた。濃度が上がりすぎた魔力が可視化され、赤い靄が地下室を満たし始める。靄は部屋の中を複雑な軌道で流れており、よく観察してみるとその軌道はひとつのルーン文字を形成している。可視化するほどの変質した魔力によってルーンを描くことで、この世の物質で形作られたルーンよりはるかに強力なルーンを形成しているのだ。すでに失われた技術とされていたが、まさかこの目で目撃することになるうとは。

詠唱は続き、さらに魔力の密度は上がっていく。いまや部屋の中を漂う魔力ははつきりと目に見えるようになっており、赤い帯が巨大なルーン文字を描いていた。

普通の魔法使いが目撃すれば卒倒しかねないような大魔法を行使しているというのに、ベルンハルトは涼しい顔だ。かれこれ30分も呪文を唱え続けているというのに、いまだに疲れた様子を見せない。

詠唱が最終段階に入ったようで、僕の目にもはつきりとそれがわかった。抑揚が変化し、それとともに部屋中が赤い光に満たされ始める。

村人たちの石像が、まるで可視化した魔力に共鳴するかのようになく輝きだした。それとともに石化の術式の構成がほつれ始め、少しずつ元の人間の姿へと戻っていく。

やがて、ルーン文字を形成していた魔力が突然結合を解き、石像たちの中へと流れ込んだ。

「ルーン文字の性質を魔力に付与したのか……」

魔力でルーン文字を描くことによって、魔力そのものに描いたルーン文字の性質を与える。非常に高度な技法だ。

解呪の性質を付与された魔力が石像に流れ込んだことで、石化の術式はいっぺんに霧散した。部屋中が白い光に満たされたかと思うと、次の瞬間には石像は姿を消し、その代わりに村人たちが以前と変わらぬ姿でそこにいた。

村を襲撃した悪魔は村人を殺すことはしなかったようで、村人たちは全員がこの場にそろっていた。

「ここは……？」

「おい、どうなってるんだ！」

「あれ、わたし……」

地下室は瞬く間に喧騒に包まれた。叫ぶ男にヒステリーに陥る若い女、懸命に取り仕切ろうとする老人。横に立つベルンハルトは面倒くさそうな顔をしているが、僕もこの騒ぎを収めるのは面倒くさい。人差し指で彼をつつき、この騒ぎを収めるとジエスチャーをする。村人たちの声がうるさすぎて、普通にしゃべっても聞こえそうになかったのだ。

ベルンハルトはやれやれとでも言いたげに肩をすくめると、騒ぎを鎮めるための魔法を唱え始めた。

なんとか村人たちの騒ぎを収めたあと、僕はスタンさんと校長室で話していた。校長は応接室で客人と話しているので、一時的にここを借りているのだ。

「しかし、わしらが石になって六年も経ってたのか……実感がないわい」

あごひげを撫でつけながらスタンさんが言った。

「なにはともあれ、無事に解呪できてよかったです」

僕が言うと、スタンさんはうれしそうな顔で答えた。

「デレクはもともと賢かったが、まさかここまでの術士になっておるとはな。わしも鼻が高いわい」

先ほどの校長も似たようなことを言っていた。少し照れくさくなり、あわてて話題を変える。

「それより、スタンさんたちはこれからどうするんですか？ 村は壊滅したままだそうですし……」

「そのことなら問題はない。近くに最近廃業したホテルがあつてな、高畑さんがそこを買い取ってくださったんだ。村の皆さんはそこに泊まっていただこうと思っっている」

いきなり高畑さんの名前が出てきて驚いた。しかしまあ、ホテルひとつを買い上げるとは太っ腹だ。校長の言葉にうなづき、僕は出された紅茶を啜った。

「積もる話もあるが、わしは村人たちと話してこなければ。今日はこれにて失礼させていただく」

スタンさんはそういって立ち上がり、部屋を出て行った。まあ、

彼には家族がいるのだ。村で指導者的な立ち位置にいるとはいえ、いつまでもここに引き止めるのも無粋というものだろう。

さて。名残惜しいが、僕もそろそろ帰るとしようか。こっちに泊まる予定はないし、村人たちに会うたびに質問攻めにされるのでいい加減うんざりしてきた。

「では、僕も今日は帰ろうと思います」

「そうか、まあ元気でやりなさい」

「はい。では、さようなら」

校長室から廊下に出て、転移魔法でロンドンのゲート近くまで転移する。

転移した直後、僕の魔力を追跡してベルンハルトが転移してきたのと同時に背後から声をかけられた。

「やあ、デレク君。召喚成功したんだってね、おめでとう」

振り返ると、そこには高畑さんがいた。夏だというのにきちんとしてスーツを着ており、見るからに暑そうだ。もっとも、本人によればスーツに施してある魔法的な細工によって真夏に着てもちょうどいいらしいが。

「あ、高畑さん。お久しぶりです、ちょうどスタンさんたちの解呪が終わってこれからアリアドネーに帰るところです」

「解呪も成功したんだね、良かったよ。僕もあの村には知り合いがいたから、ついでに会いに行くとしよう」

高畑さんはうれしそうに笑い、それからふと思いついたかのように手を打って言った。

「そういえば、デレク君は卒業後はどうするんだい？ 確か、もうそろそろ卒業だよな？」

「進路はまだ決まっていんですが、アリアドナー大で研究員をしないかと誘われてます。まあ、すごく惹かれているというわけではないんですが」

僕が答えると、高畑さんは頷いてから切り出した。

「実は、麻帆良はいま人員不足でね。デレク君、良かったら魔法先生としてうちに来てくれないかな？」

「魔法先生、ですか」

「ああ、教員の方も定年退職が相次いで人材不足なんだ。ネギ君には修行という形で来てもらうことになってるから、彼のサポートも兼ねてきてくれると嬉しいんだけど……」

麻帆良。確か日本の埼玉県にある学園都市で、関東魔法協会の本部がある場所だ。

これはちょうどいいかもしれない。かねてから日本には行きたかったし、教職にも惹かれている。それに、まだ幼いネギを一人で行かせるのも心配だ。高畑さんは忙しいだろうからネギの面倒を見き

れないだろうし、人員が不足してるならネギのサポートにさける人員もそういないはず。

「もちろん、いますぐに返事をしろとは言わないさ。来年の二月から来てほしいと思ってるから、おそくても一月までに返事をもらえればいいよ」

「そうですね、なかなか魅力的な提案ですから前向きに検討したいと思います」

「そうしてくれるとありがたい。僕もできる限り麻帆良にいたいんだけど、最近またきな臭い動きがあるからね。出張が多くて」

悠久の翼、か。高畑さんはここ数年、常に働きすぎな気がする。

「そんなに大変なら、僕も手伝いましょうか？ いまなら上級の悪魔を10匹ほどお貸しできますが」

僕がそう申し出ると、高畑さんはその提案に飛びついた。

「いいのかい、そんなに送ってもらって」

「僕の護衛はベルンハルトだけで十分ですから。じゃあ、どちらへ派遣すればいいでしょう？」

「それじゃあ、日本の麻帆良の学園長室へ送ってくれるかい？ 僕は明日には日本に戻るから、明日のお昼くらいに送ってもらえれば助かるな」

「わかりました。では、その時間に送ります」

「ありがとう。じゃあ、僕はそろそろ行くから」

「はい、お気をつけて」

懐から転移符を取り出して高畑さんは転移していった。僕も腕時計で時間を確認し、魔法世界に通じるゲートへと歩いていったのだ。

9話

スタンさんたちの解呪を済ませた日から半年と少しの時間がたち、僕は麻帆良への就職を決めた。教員免許をぎりぎりで取得し、担当することになる政治経済のカリキュラムについても一通りの学習を終わらせた。時間が足りなかったのでアリアドネー大学秘蔵のダイオラマ魔法球を何度か使用したが、とりあえず最低限教師としてやっていけるだけの力は身についたと思う。

アリアドネーのアパートを引き払って、荷物を詰めた魔法のトランクを引きずって成田空港に着いた。時刻は早朝、今日から早速授業に入ることなので朝は早いのだ。

学園長からの電話によれば空港に迎えの人間が来るはずなので、トランクを引きずってうろうろする。ベルンハルトを霊体化させて傍に控えさせてあるから、魔法関係者ならすぐにわかるはずだ。迎えによこすのは魔法生徒だとのことだったので、そろそろ声をかけてくるだろう。

そんなことを考えていると、横合いから声をかけられた。

「あの、デレク・スプリングフィールド先生でしょうか？」

「ああ、君が迎えの人間か。わざわざありがとう」

声をかけてきたのは、線の細いサイドテールの女の子だった。竹刀袋を背負っているが、たぶん中身は真剣だろう。魔法で処理された金属の気配が感じ取れる。ベルンハルトの放つプレッシャーが気

になるのか、少し警戒しているようだった。

「桜咲、と申します。では、こちらにタクシーを待たせているのでついてきてください」

無愛想というわけではないが、どことなくがった雰囲気の子だ。本人が意図してやっているかどうかはわからないが、論文の提出期限が迫った大学生みたいなびりぴりとした雰囲気を持っている。

タクシーのトランクに荷物を放り込み、僕は後部座席に乗った。桜咲君は助手席に乗り込む。タクシーの運転手もどうやら魔法関係者らしく、僕の隣の席に霊体化したベルンハルトがいるのを感じたのか少し驚いた顔をした。まあ、現界しているときに比べて格段に落ちるとはいえ、それなりにプレッシャーが放たれているのだ。驚かないほうが無理がある。

転移符を使うものかと思っていたが、よく考えてみればあれはなかなか高価なマジックアイテムだ。学園長も組織を預かる人間だし、高畑さんほど太っ腹なお金の使い方はしないだろう。

お金といえば、麻帆良の魔法先生はかなりいい給料が出る。僕の貯金は現在8億円ほどだが、この分では40歳までに40億円ほどをためることもできるかもしれない。そのくらいお金がたまれば仕事を引退しても悠々自適の隠居生活が送れるだろうし、楽しみだ。

タクシーは高速道路に乗ったが、車内はまるで葬式のように静かだ。運転手は運転に集中しており、桜咲君は窓の外をぼうつと眺めている。僕はもともと沈黙を苦痛としない人間だからどうでもいいのだが、隣に座っている霊体化状態のベルンハルトは退屈そうな顔

だ（霊体化が可能な悪魔と契約した術士は、霊体化状態の悪魔を
視できる）。

やがて、朝の七時ごろになると麻帆良の学園都市についた。運転
手に礼を言つて電車を降り、荷物の入ったトランクを取り出す。

「ここからは電車で最寄り駅まで行つて、そこから徒歩で学園長室
に向かいます。着いてきてください」

ついでにこれも渡しておきます、と言つて桜咲君は僕にカードを
渡してきた。

「これは？」

「学園関係者のためのフリーパスです。交通機関は乗り放題になる
ほか、クレジットカードとしても使えます」

「なるほど、ありがとうございます」

タッチ式のカードらしく、自動改札にタッチして通り抜けること
ができた。なるほど、便利なものだ。

朝の電車はそれほど混んでいないが、それでもやはり生徒は多い。
赤毛の外人は目立つのか、女学生がこちらを見てなにやらひそひそ
と話している姿が目に入った。聴力を強化して内容を聞いてもいい
が、精神衛生上よろしくなさそうなのでやめておく。

桜咲君は竹刀袋を背負つたままつり革につかまり、目を閉じてい
る。手持ち無沙汰な僕は先日購入したフィンランドのメーカーが作

っている携帯電話を取り出し、インターネットに繋げる。メーカー内部にも魔法関係者はおり、空間拡張の魔法を使って内部にパソコン部品を詰め込むことでPC並みのスペックを備えた携帯電話を紹介してくれた。百二十万円などというところでもない値段だったが、いい買い物だったと思っている。

電車に乗り込んでから20分ほどすると、桜咲君が声をかけてきた。

「先生、次の駅が最寄り駅です」

「わかった」

短い言葉を交わし、携帯電話をコートの内ポケットにしまって電車を降りる準備をする。

しばらくすると電車は止まり、ドアが開いた。生徒たちに先を譲り、トランクを引きずって後から降りる。

空はよく晴れており、空気は冷たくて新鮮だ。桜咲君と並んで歩き、学園長室へと向かう。

十分ほど歩き、女子中等部の校舎内にある学園長室についた。桜咲君が扉をノックすると、中から返事が返ってきた。

「入ってくれ」

電話で聞いた学園長の声だった。桜咲君は失礼します、と一声かけてから入室し、僕もそれに倣う。

学園長の頭は、なんとというか生物学的に突っ込みどころ満載だっ

だが、事前に高畑さんに教えてもらっていたので動揺はしなかった。

「はじめまして、デレク・スプリングフィールドです。今日からお世話になります」

「おお、アリドネーから遠路はるばるよく来てくれたのう。疲れておるじやろう、かけてくれ」

学園長はそういって、机の前にあるいすを指し示した。

「では、失礼します」

いすに腰掛け、トランクは傍らに置く。

「さっそくじやがのう、警備員も引き受けてくれるということじゃから、シフト表を作ってみたのじゃ。見てくれるかのう？」

学園長が差し出したB5サイズの紙を受け取り、向こう一ヶ月のシフト表を眺める。

表には担当地区と時間、チームメンバーの枠があった。チームメンバーのところ「桜咲」とあるのを見て、学園長に尋ねる。

「学園長、学生も警備に回しているのですか？」

「なにぶん人手が足りなくて、な……桜咲君は京都神鳴流の優秀な剣士じゃ、召喚術士のおぬしとは相性がよかるう。それに、まだ地理も把握できておらんだらうし」

「……わかりました。じゃあ桜咲君、今日からよろしく頼む」

僕の後ろに立つ桜咲君に声をかけると、彼女は小さく頷いた。

「うむ、よかるう。それで住む場所についてじゃが、こちらのほうで家を用意させてもらった。女子校エリアの外縁にある一軒家じゃ、授業が終わったら桜咲君に案内させよう」

「ありがとうございます」

その後も授業や学校についての諸注意を受け、七時半には職員室のデスクに案内された。

「隣の机がネギ君のじゃな。デレク君には2 - Aの副担任も務めてもらうから、ネギ君のこともよろしく頼むぞ」

「承りました」

一通りのことを教え終わると、学園長は去っていった。

本来なら指導教員がつくはずだったが、アリアドネー大学のほうからお墨付きをもらったおかげで指導教員をつけることは免除された。周りの先生方に挨拶を済ませると、僕は机の脇に置いたトランクから教材ともろもろの資料を取りだし、机に置いた。政経の担当としては時事や政治事情にも通じていなければいけないため、教える内容の少なさに反して読まなければいけない資料は多いのだ。

時間割を見ると、今日の授業は2コマ。2 - Aと2 - Bだけだ。

2 - Aでは二時間目、2 - Bでは一時間目に授業をすることになっている。

コーヒーをすすり、授業で使うプリントを整理していると始業のチャイムが鳴った。クラス担任の先生たちは出席簿を持って教室に

行き、ほかの先生たちは授業の準備を始める。

ノートPCを起動して出席簿のデータを打ち込み、授業で配るプリントの印刷を終える。時計を見るとそろそろ授業が始める時間だったので、出席簿とプリントを持って2・Bの教室に向かった。

2・Bでの授業は無事に終わった。教員免許取得のために一ヶ月ほどアリアドネーの高校で研修をしていたので、その経験が役に立った。生徒はかなり元気で質問攻めにあっただが、先ほど高畑さんに教えてもらった限りでは2・Aはもつと元気らしい。一抹の不安を感じながら、二時間目の授業の用意を済ませて教室へと向かった。

教科書を使って授業をすると、やる気のない生徒は寝てしまうものだ。僕のプリントは穴埋め式になっており、授業を聞くか自分で教科書か何かで調べないと空欄を埋められないように作ってある。授業のはじめに試験では空欄の語句を出すと宣言するので、そうすればやる気のない生徒も起きようとはするだろう……まあ、寝ていてもたたき起こせばいい話だが。

チャイムが鳴ってすぐに、僕は教室の扉を開けて中に入った。僕のことについてはネギがHRで連絡しているはずだが、果たしてど

うだろうか。ここに着てからまだ彼とは会っていないが、まだ9歳の彼が先生としてちゃんとやれるかどうかというのはなかなか不安だ。

教室に入ると、まず複数の鋭い視線を感じた。高畑さんから大体の事情は聞いているので、動じたりはしない。

「ネギ先生から連絡は行っていると思いますが、今日から政経の授業は僕が担当することになりました。デレク・スプリングフィールドです、よろしく」

僕が自己紹介をすると、生徒たちはざわめきだした。ネギめ、どうやら仕事をしなかったようだ。まあまだ子供だし、仕方がない。スプリングフィールド、という名前を聞いて反応したのが数人。座席表と照らし合わせて確認すると、最もわかりやすい反応を見せたのは超君と龍宮君か。それと、真祖の吸血鬼、ダーク・エヴァンジェリン。彼女の事情についても大体は高畑さんから聞いているので、僕を見て驚くだろうということはある程度予想できていた。高畑さんいわく、僕は眼鏡をかけている以外はサウザンドマスターとだいぶ似ているようだし。

「先生！質問タイム、いいですか？」

特徴的な髪型の元気そうな生徒が手を挙げた。朝倉君、か。

「10分だけなら。構わないよ。ただし、ほかのクラスに迷惑だからうるさくはしないように」

僕が釘を刺すと、彼女はうれしそうに笑ってうなづいた。

「年はいくつですか？」

「16歳。飛び級で大学を卒業したから」

うわ、思ったより年近いじゃん、とつぶやく声が聞こえた。

「彼女はいるんですか？」

「いないよ。興味はあるけど」

おお、とどよめく生徒たち。騒ぐなといったのが聞こえなかったのか。

「苗字が同じってことは、ネギ先生のお兄さん？」

「いや、従兄弟」

朝倉君はなにやら熱心にメモを取っている。

「それじゃ、最後の質問。このクラスで誰が一番かわいいと思う？」

……ずいぶんとまた、答えにくい質問だ。

「まだ会ったばかりだから一番かわいい子は決められないけど、一番かわいくないのは君だろうね」

苦笑しながら冗談を言うとクラスは一瞬だけ静まり返り、それが

ら大爆笑に包まれた。おお、これがイギリス流のブラックジョークですか、とつぶやく声が聞こえた。

「うわひっで」

朝倉君も苦笑いし、困ったように頭をかいた。まあ、いやな質問をしたという自覚はあったのだろう。

「じゃあ、授業を始めようか」

収容がつかなくなりそうな空気を感じ取った僕はそう宣言し、プリントを配り始めたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7902z/>

転生者は召喚術士

2011年12月29日13時38分発行